

ないが、これにたいして、西海道・山陽道の国々に関する知識は詳細で客観性の高いことが見られる。

この情報の「西詳東略」は、鄭若曾の日本知識が嘉靖34年に「宣諭日本」した蔣州・陳可願の見聞によるところが多かったことから解釈できる。明史・日本伝、胡宗憲列伝により、大友義鎮・大内義長に倭寇鎮撫を要請することを目的とし、蔣州・陳可願は豊後・山口に赴いたのである。「西海道」と「山陽道」に関する情報が特に豊富である原因は、経験者の見聞によるからではないか。

3 「日本国図」の影響

『籌海図編』が後世の日本研究に大きく影響を与えたよ

うに、「日本国図」は後の多数の日本研究書に収められた日本図に継承された。管見に入ったものだけで、李言恭『日本考』の「日本国図」、侯繼高『全浙兵制附日本風土記』の「日本国図」、蔡逢時『温処海防図略』の「日本倭島図」、章潢『図書編』の「日本国図」、茅瑞徵『万曆三大征考』の「日本図」などがあるが、中には原図の南北を逆転してそのまま転載したのもある。この点だけ見れば、鄭若曾の「日本国図」は明代における日本図の「決定版」といえるほど、後世から重視され、参考とされた画像資料であるように考えられる。

(許海華氏は2007年10月10日~23日まで訪問研究員として来日された。)

対照的な日本

唐沢 ダニエラ (サンパウロ大学大学院 日本語・日本文学・日本文化修士課程) KARASAWA Daniela

初 めての飛行機、初めての海外。2006年12月の日本での2週間は大きな発見と神奈川大学COEプログラムへの感謝で一杯の期間であった。

幼少の頃より、私は常に日本についての本や雑誌に触れ、リベダルーデ(自由)という東洋人地区の日本人のお婆さんたちの話を聞いていた。そのミュージカルのような言語は魅力的であったが、一音もわからなかった。大学の日本文学科に進学してはじめて、幼少時に耳にしたミュージカルの魅力を理解し、また今回の日本への旅でさらに新しい発見ができた。それは進歩的集中的な学習による、この素晴らしい言語の細かいニュアンスであった。

1 漫画のグローバル化(グローバリゼーション)

筆者が行っている研究は漫画のグローバル化とそのブラジルにおける影響、また青少年に対する社会的、商業的様相についてである。私は、2005年半ばに始めたこの研究を2006年末に修了し、日本文化研究の修士号を取得する予定である。

しかしブラジル社会の中にある漫画と日系人のブラジルにおける位置を語ることは複雑であるし、ブラジルの

伝統文化から離れたものである。ブラジルが日本からどんなに多様な品々を大量に輸入する時代になっても、漫画は数十年来日系人だけのものではあった。つまり、日系人と何らかの関わりを持たないブラジル人には日本語が読める人は少なく、またポルトガル語ができない書店の老店主と会話ができる人もいなかったからである。

90年代に入ってやっと、ブラジル国内で非日系人への漫画販売が拡大していく。ポルトガル語訳版の普及により、日本語が理解できなくても、漫画に興味を持った人が漫画本を買い集めるようになったのだ。

ブラジル文化のもう一つの特徴は、新しいトレンドや行動に対して、海外での成功を待って見解を決める傾向があるということである。ブラジル企業はフランスやアメリカなどでの漫画の成功を待ったのち、このジャンルの娯楽の可能性を信じるようになる。

最近ブラジルでは、漫画というものは宣伝や出版業界でよく見られるように、「コミック」が美術の概念に含まれるようになった革命と見なされており、ブラジルの若者の日本美術の概念に対する注目は漫画とアニメに端を発するものである。

2 「ホーム」のイメージ

「お帰りなさい、ご主人様とお嬢様」我々はこの家庭的な挨拶により秋葉原のメイドカフェに迎え入れられた。現代の日本のポップカルチャーの象徴の一つであるこの類の店は、客に「ホーム」や「帰宅」の感覚を提供してくれる。初めて体験する外国人にとってはとても奇異な印象で混乱させられるが、数分後にはよく理解することができた。こういうもてなし、演技、その全てが軽い愛撫を持つ雰囲気をつくるためにある。メイド達はとても

* 本稿は英語で提出されたものをジョン・サイモン（2005年度COE調査研究協力者）が翻訳し、また紙面の都合から編集部で手を加えたものである。

フレンドリーで、笑顔を絶やさず、そのコスチュームと同じく実際の家族、妹分のようなものである。

メイドカフェは今回の旅の中で最も衝撃的なイメージの一つであった。その思わぬ光景、ヨーロッパのメイド衣装とアットホームな雰囲気に、世界的に反映し拡大する、多様な日本ビジネスの哲学を感じ取ることができた。（唐沢ダニエラ氏は2006年12月2日～12月18日まで訪問研究員として来日された。）

REPORT

REPORT

REPORT

REPORT

REPORT 5

訪問・派遣研究員によるレポート

REPORT 6

心はウチナンチュ

グラウジョール・カルロス（サンパウロ大学大学院 日本語・日本文学・日本文化修士課程） GLAUJOR Carlos

私は今年からサンパウロ大学の修士課程に入り、ブラジルで創作エイサー（琉球國祭り太鼓）の活動をしている沖縄系の人々の帰属意識について研究している。

神奈川大学COEプログラムのお陰で、私はJICA横浜移民資料館や、成城大学、武蔵大学、慶應義塾大学などの機関に調査研究に赴き、各機関の研究者や先生方に私の研究分野に対する知見を伺うことができた。

神奈川大学図書館で見つけた沖縄の文化・民族性・独自性などに関する資料と、諸先生方の手助けのお陰で、今回、随分と研究を進展させることができたと思う。

東京と横浜では、それぞれの支部の創作エイサーの活動に参加し、ただの見学者としてではなく一緒になってエイサーを楽しんだ。

10月7日には、琉球國祭り太鼓東京支部が出演する「四谷大好き祭り」を見に四谷へ行き、そこでは支部の団員の方々と交流することができた。

横浜では、ブラジル支部の団員であるということで、神奈川支部のリーダーから入門クラスへの仲間入りを許され、その練習に参加したのみならず、10月14日の戸塚スポーツフェスティバルでの演技にも出演させてもらっ



た。（写真はその時の様子）

日本支部の活動の様子や舞台裏を見たことで、ブラジル支部との違いや共通点などを実感することができた。

ウチナンチュの経済的、文化的な輪が世界中に広がっていく中で創作エイサーが果たしている役割を深く理解するために、今後はその理論と実践を統合していきたいと思っている。

（GLAUJOR Carlos氏は2007年10月1日～10月17日まで訪問研究員として来日された。）

* ウチナンチュとは沖縄の言葉で「沖縄人」の意味。

* 本稿は英語で提出されたものを藤本真由海（COE支援事務局）が翻訳し、また紙面の都合から編集部で手を加えたものである。